

○ベニバナボロギク (新和名) (津山 尙) Takasi TUYAMA: An adventive of Composite family, *Erechtites missionum* Malme.

南洋各地に拡がっている雑草で、どうしても種名の判らない *Erechtites* 属の一種があつた。しかもそれは南洋春菊の名で太平洋戦争中、南方戦線では重要な代用野菜として広く知られたものであつた。これが数年前から九州地方に入つて大分繁殖しはじめたので尙更気にかかつていたのであるが、昨夏原寛博士が英国 Kew 植物園所蔵の *Erechtites* の標本を検査して、*E. missionum* Malme (in Svensk Vet.-Akad. Handl. 32-5: 73) と同所で同定されている標本に最も近い由小生に知らされた。この種は南米 Brasil から記載されたが、アジア南部産の標本も既に同属葉籍には収められていたそうである。日本で既知の同属植物との比較表は次のようである。なおこの植物には南洋春菊なる和名が既にあるのであるが、標準和名としては少し特殊なので以前から用意していたベニバナボロギクの名をつけたい。日本産の他の種との比較表は次の様である。

	<i>E. valerianaefolia</i> タケダグサ	<i>E. hieracifolia</i> ダンドボロギク	<i>E. h. var. cacalioides</i> ウシノタケダグサ	<i>E. missionum</i> ベニバナボロギク
花色	淡紫—淡紅紫	黄緑—褐緑	同前	紅赤→橙赤→レンガ赤と変化する
冠毛	淡紫紅色	白色	同前	同前
鋸齒	不齊重鋸齒	不齊低鋸齒、微凸頭	不齊波状鋸齒	不齊鋸齒、やや微凸頭
莖	無毛	粗毛散生	粗毛多し	軟毛散生
香氣	弱	なし	なし	春菊様の強い香氣

ベニバナボロギクの花序は頭花が一般に少く、疎であり、時には莖の上方で多数に分枝してその各々の先端に一頭花をつけるに過ぎないことがある。また少くとも南方での観察では中部又は下部からも稍多く分枝して叢生状を呈することが多い。莖には他種に比して著しく軟かで、全草を茹でて食べると春菊を思わせる位であり、戦時中の所謂食用野草から連想されるような不味なものではない。葉の下半にやや互生的に大形の裂片を生じ下部は長い葉柄に流下して時に小耳をつくる。瘦果は褐紫色有稜で、稜の間に平臥して少し曲折するくせのある白色毛がある。*E. valerianaefolia* では毛はやや長く稜の外にはみ出している。葉形については Fig. 1. 参照。

南洋春菊の名付親は現在小川香料株式会社の岡部正義氏である。同氏はパラオ熱帯産業研究所に勤務をはじめられた時(昭和15年2月)以後、Palau 島、Peliliu 島、Angaur 島などパラオ群島内でこれを発見命名されたものの由である。昭和15年という戦争に近づいていた時代であるが、同島では以前から生野菜の不足に悩み、小生がはじめて

同群島に足を入れた昭和12年及び同14年頃にも内地から送られた半ば腐敗したダイコンやキャベツが高値に売買されていた。しかしその時までにはこの植物はパラオには確実になかった。小生が初めてこの植物を見たのは昭和16年1月、同島の熱帯産業研究所構内の島の雑草中において岡部氏から指し示めされた時である。広島大学の堀川芳雄教授は当時この植物の種子を採集して、代用野菜にする目的で廣大構内に播かれたとか聞いている。その後小生はニューギニアのマノカリ附近及びハットム、アングアウル島でも採集し分布が広いことを知った。



Fig. 1. Leaf-blades of *Erechites* (×ca. 1/2) A-B. *E. valerianaefolia* (Bonin Isl.), C-D. *E. hieracifolia* (Honshu: Sagami & Chikugo), E-K. *E. missionum* (Angaur Isl., K. from Kyushu), L-M. *E. hieracifolia* var. *cacalioides* (Bonin Isl.)

戦争に入るに及んで、この植物の名は高まり、岡部氏は「南洋新聞」や「パラオ地方における救荒植物」なるパンフレット(昭和15年)で宣伝された。戦時中ニューギニア方面の作戦軍はパラオを基地としていたためにすべての兵士は同島で島庁の役人から、この植物の効用について教えられたもの由である。当時この南洋春菊がニューギニア戦線で実際に食用になったことは内地の新聞記事にもものつたことである。岡部氏によるとセレベス島マカッサールでも食用の目的で戦時中に栽培された由である。

戦時中に多くの救荒植物図説が出たが、渡辺清彦博士の南方圏有用植物図説、第2編食用植物(昭和20年5月、昭南植物園)及び郡場寛博士の南方圏救荒植物(昭和18年11月、昭南植物園)にこの植物の図があり、学名は *E. hieracifolia* となっている。岡部氏編 現地自活参考資料 熱帯に於ける食用植物(昭和19年3月)に「ナンヨウシュンギクと新称す」として出ているが、これは氏がマカッサル研究所に赴任後の出版でこの時の新命名ではない。又 M. R. Henderson: Malayan wild flowers pt. II, p. 249 (1950) の *E. hieracifolia* も同様にこの植物を図示している。この際ペニバナポロギクがマレーシア及び他の太平洋地域において戦争前の記録が全く見当たらないのは注意すべきである。即ちこの植物は戦争より少し前にマレーシアに輸入され、戦争前後に拡がったもので、言わば戦争の申し子のようなものではないかと思われる。小生は各地におけるこの植物の野生化の年代を下の表の()中の年号或はそれからあまり溯らない時代であると推定している。

Malay Peninsula (1943, Icones of Koriba), Dutch New Guinea (1940* Kanehira-Hatusima collection in Herb. Kyoto Univers.), Celebes (1943, from Mr. Okabe's personal record), Palau group (1940 ex Okabe; 1941* Tuyama), Formosa (1940* R. Imazeki in Herb. Sci. Mus. Tokyo), Japan: Kiusiu (1946-7 ex T. Sugino; 1950* T. Sugino in Herb. Tokyo Univers.), Shikoku (1951* S. Yamamoto in Herb. Nat. Sci. Mus. Tokyo). この表の中 * 印は実際の標本に当たったもの、他は印刷物又は個人の記録によつたものである。尙戦後出版された Merrill: Plant life of the Pacific worlds. の中に2種の *Erechtites* の記事及び図がある。学名は *E. valerianaefolia* 及び *E. hieracifolia* を用いているが双方ともに pink 色の花をもつとしている。この色に関する限り、少くともこの中の一種についてはペニバナポロギクとの混同があると思われる。

念のため日本内地における採集地は次のとおりである。九州:一筑後:大牟田, 三池山山頂(杉野辰雄, No. 1, Aug. 10, 1950, “最近3~4年間に大牟田地方に大繁殖”); 朝倉郡, 甘木町, 路傍(山崎敬, Oct. 3, 1952); 豊前: 英彦山, 千木杉(大内準, No. 168, Oct. 1, 1950). 日向: 東臼杵郡北浦村(平田正一, 1949, “平地其の他最近に県内に広く分布” 標本を見ず); 同, 乙島(平田正一, No. 1, Aug. 18, 1952); 同, 白岩山, 間伐地, 1200 m. (平田正一, Sept. 25, 1953); 同, 延岡市内(長沢光男, 1953年, 標本未見). 四国:一伊予: 温泉郡, 杉立, 300 m. (山本四郎, Aug. 26, 1951); なお台湾では台北州新庄(今関六也, March, 24, 1940). 最後の2者は科学博物館, 他は東大理学部所蔵。小生所蔵の南洋及びニューギニア産の標本はこの両所に収めておく。終りに本研究を援助された原寛博士に感謝する。(お茶の水女子大学)

Summary

Erechtites missio um Malme of South American origin is propagating vigorously in Kyushu since about 1946-7. This plant was collected by myself in Ins.

Baobelthaob and Ins. Angaur of Palau group, Caroline in 1937 and 1939 respectively and at Manokwari and Hattam, New Guinea in 1943. However, the scientific name has long been unknown to us until Dr. H. Hara found it last summer in Kew Herbarium. This is easily distinguished from other *Erechtites* of neighboring regions by loose inflorescence, strongly pendulous flower bud, deep rosy red or orange red head, shape of leafblade as illustrated above and strong volatile odour of the whole plant. This plant seems now wide spread in Malaysia. Consulting the extant specimens and some personal records and also many wartime publications in which this plant is illustrated under the erroneous name of *E. hieracifolia*, a list of reliable dates of introduction to (or records of early occurrence in) several localities was made in the Japanese text. (*denotes the extant specimen.)

〇タイトウクグとヒメクグ (大井次三郎・小山鉄夫) Jisaburo OHWI and Tetsuo KOYAMA: *Cyperus Kernianus* and *C. brevifolius*.

At the beginning of last year, Koyama completed a revision of the East-Asiatic *Kyllinga* of the genus *Cyperus*, however, it has not yet been published for some reasons. So we wish to publish here the following two names which had been prepared in the above revision.

1. **Cyperus Kernianus** Ohwi et T. Koyama, nomen novum—*Kyllinga cylindrica* Nees in Wight, Contrib. Bot. of Ind.: 91 (1834)—*Cyperus sesquiflorus* var. γ *cylindricus* (Nees) Kükenthal in Engl. Pflanzenz. Heft **101**: 606 (1936). Nom. japon. Taito-kugu. Distr. Formosa, China, Indo-China, Malaysia, India, Himalaya, Africa.

Koyama prepared a new name for this species in his revision, but we noticed that Dr. Kern. is holding the same view. As he has not prepared any new epithet for this *Kyllinga*, we hope to name this species in honour of Dr. Kern.

2. **Cyperus brevifolius** (Rottb.) Hasskarl var. **leiolepis** (Fr. et Sav.) T. Koyama, comb. nova.—*Kyllinga morosephala* var. *leiolepis* Franchet et Savatier, Enum. Plant. Japon. **2**: 108 (1877). Nom. japon. Hime-kugu. Distr. Japan, Korea, Manchuria, China (?).

今度種々の必要が出来てタイトウクグとヒメクグの学名をそれぞれ上記の様に改め度いと思ふ。之れ等の学名は昨年始めに小山が東亜のヒメクグ類をまとめた際に用意して居た新名の一部であるので、改訂の理由はそれが出来てから御覧戴く事にしたい。タイトウクグの名を献じたオランダの Kern 氏は Flora Malaysiana のカヤツリグサ科担当の専門家の一人である。(国立科学博物館及び東京大学理学部植物学教室)